

## [031]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7434526>

---

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 31, 2026-03-15. Seminar of Educational Sociology  
Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studiess Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



## 第 1 回比較教育社会学合同ゼミ

2026 年 3 月 21 日、「第 1 回比較教育社会学合同ゼミ」が九州大学伊都キャンパスイースト 1 号館 4 階学習環境シミュレーション室にて開催された。本合同ゼミは、教育社会学研究室（木村拓也研究室）と、比較国際教育第三研究室（花井渉研究室）の九州大学教育学部内の合同研究会である。花井渉研究室と木村拓也研究室では、九州大学教育学部及び九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻における、国際コースの拡充や海外留学支援など、教育学の国際化に尽力している点で共通している。今回の合同研究会は、2026 年秋季修了予定の大学院生の中間発表や、教育社会学研究室と比較国際教育研究室的壁を越えた交流を目的として開催された。発表者は、博士 1 名、修士 3 名、QFC-SP 生 2 名の計 6 名である。ここで、QFC-SP とは、「九州大学未来創成科学者育成プロジェクト」を指し、将来グローバルに活躍しうる次世代の傑出した科学技術人材を育成するため、高度で実践的な教育によって課題解決能力をさらに伸ばしていくことを目的とする高校生対象の教育プロジェクトである。両研究室には、2025 年 12 月より高校生が 1 名ずつ派遣され、2026 年 10 月には高校生による研究成果発表が行われる予定である。本合同研究会は、高校生にとっても貴重な進捗報告の場であり、大学での研究の雰囲気や肌身で実感できる場となっている。発表時間は、発表 20 分、質疑応答 10 分で、オンラインを含め 16 名の参加者（教社研 7 名、比較研 9 名）が集まった。各発表には、同じ研究室ではなく、異なる研究室のメンバーが質問をするよう意識した。合同研究会は 14 時 30 分から 18 時まで行われ、18 時からは教室でピザを食べながら談笑する懇親会が行われた。当日のプログラムに関しては以下のとおりである。なお、所属等は本セミナー実施時のものである。

〈プログラム（敬称略）〉

- ・劉昭之介（比較研 QFC-SP/高校 1 年）  
「中国における高等学校国際部の組織構造と大学出願プロセスに関する研究 —現地高校生の視点から見た 3 つのクラス区分—」

- ・東桃子（教社研 QFC-SP/高校 2 年）  
「早熟の研究：恋愛への関心と進路成熟は相関するの  
か？」
- ・大野義文（教社研 修士 1 年）  
「高等学校における専門職としてのコーディネーター」
- ・市丸綾由莉（教社研 修士 1 年）  
「現代日本人の宗教性と学歴的教育社会学」
- ・張凱磊（比較研 修士 2 年）  
「日中における高等教育の国際連携に関する研究」
- ・陣内未来（教社研 博士 2 年）  
「スパース推定による社会的ネットワークの規定要因  
分析——L1 罰則付き負の二項回帰分析による検討  
——」

本合同研究会の所感について 2 点述べたい。

まず、本合同研究会の一番手を務めてくれた高校生 2 人の活躍について言及する。2 人は、12 月から高校に  
通学しながら、指導教員や研究室メンバーとの限られたやり取りを通して、現段階での研究テーマや調査内容を集約したレジュメを発表した。劉さんは中国の国際部を持つ高等学校、東さんは進路が多様な定時制高校の経験から、それぞれ社会学的な問いを見つけ出し、高等教育段階の研究に接続しようとしていた。2 人の独自性に富んだ研究背景には多くの関心が寄せられ、研究の手助けとなるような目的や方法の妥当性を確認するための質問や助言が行われた。高校生は大学生とは異なり、大学の授業や研究方法論を体系的に学ぶ機会がほとんどない。そのため、自ら積極的に探究しながら、「研究とは何か」という基礎的な部分から理解していく必要がある。11 か月という限られた期間の中で、テーマ設定から調査、分析、結果のまとめまでを行うことは決して容易ではない。しかし、そのような制約の中でも、自身の経験を起点に問いを形成し、研究として形にしようとする姿勢は

非常に意欲的であり、今後の発展が期待される発表であった。

次に、両研究室間で多様な視点からの質問が投げかけられた。例えば、比較国際教育第三研究室のバプアニューギニア出身の留学生からは、社会的ネットワークの規定要因について、各国の先行研究を集めているが、先進国の議論に限られておりエスニックな社会の実態は異なるのではないかという意見が出た。また、現代日本人の「現代」とはどの時代を指すのか、どのように定義するのかという点についても指摘を頂いた。一方、教育社会学研究室からは、高等教育における日中連携について、制度上は協力関係にあるように見えても、双方の期待や目的に齟齬が生じている可能性や、意図せずして良い／悪い結果を生み出している構造に着目すると、より興味深い分析につながるのではないかという意見が出された。このように、本研究会では、研究内容に対する具体的な助言だけでなく、研究枠組みや概念設定そのものを問い直すような議論が交わされた。特に、国や文化的背景の異なる参加者からの指摘は、既存の前提を相対化し、比較研究の視野を広げるうえで重要な示唆となった。

2025年度に実施された第1回比較教育社会学合同ゼミは、九州大学教育学部、九州大学大学院教育システム専攻において、他研究室との意見交流や教育の国際化を図る挑戦的な試みであった。第1回では、高校生による研究発表も行われ、従来の研究室内ゼミにはない開かれた学びの場が形成された。さらに、比較国際教育第三研究室と教育社会学研究室内の双方から、研究内容だけでなく研究方法や概念設定に関する多角的な質問・意見が交わされ、参加者にとって自身の研究を相対化する契機となった。本合同ゼミは、すべて日本語での発表（質疑応答の一部は英語で行われた）であった。そのため、今後は日本語が母国語ではない留学生による英語発表や、国際学会での発表を見据えた日本人学生による英語発表などを取り入れることで、より実践的な国際的研究交流の場へと発展させていくことが考えられる。教育の国際化を見据えた合同ゼミの在り方を追求していきたい。

(文責：修士1年 市丸綾由莉)